

# 白糠の アイヌ語地名

## 第3回

### ○オシヨロコツ

パシクル沼から東へ、象の鼻と呼ばれる所まで続く丘陵は、海に面して崖が続いています。その途中にある崖がくぼんだ場所が「オシヨロコツ」です。

「オシヨロコツ」は、アイヌ語の「オソル（尻）・コツ（くぼみ、跡）」から、「人が尻もちをついてできたくぼみ」と解釈されていて、源義経が尻もちをついてできたという「義経伝説」に由来しています。

しかし、古い文献（「東游奇勝」1799年（寛政11）」には、その場所に滝があると記されていることから、正しくは「オ（川尻）・ソ（滝）・オロ（向かって）・コツ（くぼみ）」で「滝つぼ」という意味のようです。

### ◆地名にまつわる伝説

#### ・オシヨロコツの義経伝説

義経と弁慶がクスリ（釧路）からシラリカに向けて矢を射った。弁慶の矢はオタノシケの浜に落ちたが、義経の矢はシラリカのオシヨロコツの山にあたって松の木になった。

そして、シラリカまで来たところ、チャロ川の浜に鯨が寄っていたので、その肉を切り取り串に刺して焼いた。ところが、串のものが焼けて肉が火の中に落ちてボツと炎が大きく燃えたので、義経は驚いてとびあがり、尻もちをついた。そして尻の跡が残った。それでこれをオシヨロコツという。

そのときの松の木は枯れて、根っこからまた新しい木が生えていく。

（四宅八重子フチの話）



崖がくぼんでいるオシヨロコツ

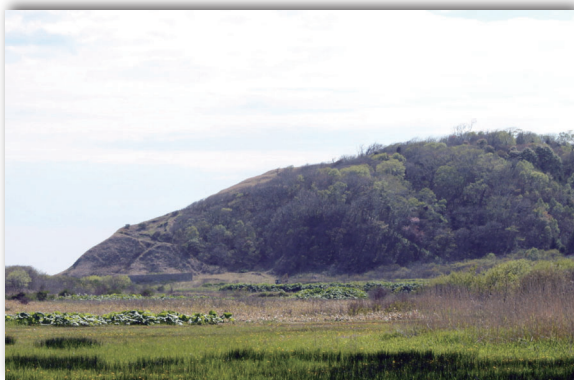
この伝説に出てくる鯨については次のような話もあります

弁慶との弓くらべに勝った義経が「どうだ、おれの弓の勢いはたいたものだろう」と自慢すると、沖の方から「そんなに威張るな」という声が聞こえたので、ひよいと見ると、波間から鯨が頭を出して笑っていた。

義経は大いに怒って、すぐさま射殺して引き上げ、しりから串を差し込んで土に突き刺し、火をたいて焼いた…。

（矢石フチの話）

〔市立釧路図書館報『読書人』掲載「釧路地方の伝説」〕（佐藤直太郎）から引用）



象の鼻で知られているイワエド

### ○イワエド

オシヨロコツがある崖の一番東側は「象の鼻」と呼ばれる所です。その場所をアイヌ語で「イワエド」と言います。

「イワエド」とは、「イワ（岩山）・エド（突端）」で、岩山が象の鼻のように海に突き出ている様子から名付けられました。

このような「義経伝説」は全国各地にあり、アイヌ語地名などの由来になっていますが、研究者によると、この伝説は、和人がアイヌ神話に義経・弁慶を結びつけ、アイヌ伝説をつくりかえたり、創作したもので、江戸時代に広められたと言われています。